

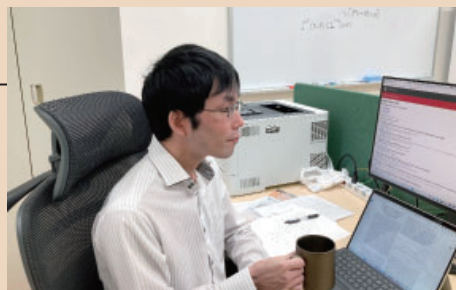


布能 謙

東京大学工学系研究科物理工学専攻 講師
(前 理論・計算分子科学研究領域 特任助教)

分子研での時間を振り返って

ふのう・けん／2016年東京大学大学院理学系研究科物理学専攻にて博士（理学）の学位取得。北京大学 特別研究員、理化学研究所 特別研究員を経て、2022年分子科学研究所 理論・計算分子科学研究領域 特任助教。2024年5月より現職。



2022年7月から2024年4月までの2年弱、分子科学研究所 理論・計算分子科学研究領域 理論分子科学第二研究部門（石崎グループ）の特任助教として大変お世話になりました。私は物理化学、分子科学との接点が少なかったため、分子研には学生の時に研究会に参加するために一度来ただけで、知り合いもいないような状況でした。しかしながら、実際に少し話してみると、分野を超えた共通の興味というものも多々あることに気づきました。

特に、石崎グループでは量子散逸現象について、石崎先生、三輪さん、坂本さんとはたくさんの議論をさせていただき、同じ現象でも分野によって異なる捉え方、アプローチがあることを改めて目の当たりにし、視野を大きく広げることができました。

2024年5月からは東京大学 工学系研究科 物理工学専攻にて研究・教育活動に従事しております。分野的には物性物理・量子情報・統計力学を専門とする先生方が多いのですが、分子

研時代における物理化学・分子科学・物質科学とのつながりを大切にしながら、今後も研究活動を精力的に進めていきたいと思います。最後に分子研でお世話になった皆様にお礼申し上げます。特に石崎先生、三輪さん、坂本さん、Yamingさん、櫻井さん、西田さん、そして秘書室の増田さん、千葉さん、赤羽さんに深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

奥村 慎太郎

京都大学大学院工学研究科合成・生物化学専攻 助教
(前 生命・錯体分子科学研究領域 助教)

分子研の研究環境

おくむら・しんたろう／2018年京都大学大学院工学研究科・合成・生物化学専攻博士課程修了、博士（工学）取得。信越化学工業株式会社（新潟県、2018.04-2019.12）を経て分子科学研究所助教（2020.01-2024.03）、2024年4月より現職。東京23区のひとつ板橋区出身。練馬区も元々は板橋区。



2020年1月から2024年3月までの4年と3か月の間、錯体触媒研究部門魚住グループの助教としてお世話になりました。現在は京都大学に助教として異動し、研究を続けております。分子研着任前は信越化学で働いていましたが、一念発起してアカデミアでポ

ジションを探していたところ、分子研で採用していただき、アカデミックキャリアをスタートできました。人生の一大決心でしたので、できたばかりのブランドイン東岡崎に泊まり、初めて行った分子研での面接は鮮明に覚えています。

分子研の研究環境は素晴らしかったです。必要な実験装置はほとんど何でもありますし、初めて扱う装置は機器センターの方々がサポートをしてくれます。一人あたりに対して装置の数も多いので、ストレスフリーに実験をすることができました。広い実験スパー

スも大変快適でした。

分子研では働いている人が作り出す雰囲気も研究に最適でした。全員が研究成果・論文を出すことに意識が向いているように感じ、モチベーションが自然と高まる環境でした。様々な学生が大勢いる大学では、そうした環境を作り出すことは実は容易ではないと思います。人数は少ないですが、分子研に来る学生も研究に対するモチベーションが高いと思います。博士課程を希望し、わざわざ他大学から来ている事、また分子研の熟練研究者たちが作

り出す雰囲気に強く影響される事がプラスに働いていると感じました。そんな分子研の環境があったからこそ、私も腰を据えて研究に没頭・挑戦することができました。分子研・総研大の知名度がさらに高まり、モチベーションの高い学生・研究員がたくさん分子研に来るようになれば嬉しく思います。最後に、お世話になった分子研の皆様、魚住先生・魚住グループの学生の皆様・研究員の田澤さん・技術職員の鳥居さん・秘書の佐々木さん・谷分さんには大変お世

話になりました。研究面でも精神面でもかなり支えていただきました。また、川合前所長・渡辺所長・瀬川先生・楳山先生・草本先生や助教仲間の大家さん・松岡さん・杉山さんにも大変お世話になりました。分子研で得た経験をもとに邁進してまいります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします！

堀米 利夫 あいちシンクロトロン光センター 光源アドバイザー (前 極端紫外光研究施設 (UVSOR) 技術支援員)

分子研を去るにあたり……幸運でした

ほりごめ・としお／1973年：高エネルギー物理学研究所（現 KEK）入所、1980年：分子科学研究所 装置開発室、その後、名古屋大学 装置開発室、北陸先端科学技術大学院大学を経て、2002年：分子科学研究所 UVSOR、2023年：あいちシンクロトロン光センター（現在）。UVSORを退職後は時間的余裕ができ、断捨離を計画しています。



分子科学研究所の極端紫外光研究施設（UVSOR）を退職してから、早くも1年と数か月が経ちます。現在は、あいちシンクロトロン光センターで加速器を運転する光源系アドバイザーなる身分で、短時間勤務させていただいています。加速器の運転についてはほとんど経験もなく知識も乏しいですが何かお役に立てるよう努めています。ただ、週に3日、愛環に揺られて通勤していますが、長い通勤時間が少々辛いところです。

さて、私が分子科学研究所に技術職員（当時は技官という名称）として赴任したのは、44年前の昭和55年5月でした。当時の模様は正確には覚えていませんが、現存の建屋はほぼ完成したばかりでした（南実験棟、UVSOR棟は後に建設）。当時の研究所などの建

屋の外装色は白系が多いという先入観があった私には、赤っぽいレンガ造りのような実験棟が異彩を放っているように感じました。

最初は装置開発室で機械工作を中心に、実験に必要な機器・装置などを製作する業務に従事していました。当時の装置開発棟1階工作室は、設備されている工作機も少なく、広々した空間で工作ができましたが、時間と共に工作機械などが増え、工作依頼の件数も増えました。それでも、多種多様な面白い実験装置製作に携われたことは大変恵まれていたと思います。一方で、自分の未熟さから工作依頼で持参される図面を十分に読み切れず、研究者に不愉快な思いをさせたこともあったと反省するところも多々あります。しばらくして、極端紫外光実験施設

（UVSOR）の建設計画が決まり、「真空を知る」必要があるということで真空装置の製作を行いながら、真空関連の勉強を周りのスタッフと意欲的に取り組みました。このような取り組みが後々の装置製作に幅を持たせるきっかけとなりました。また、装置開発室は機械工作だけでなく、回路工作、ガラス工作を合わせて部門を形成しており、これも装置製作において大変有意義なシステムだったと思います。

その後、UVSORは高度化が進み、UVSOR-IIに生まれ変わった頃にUVSORに異動しました。UVSOR-I時代には施設内（装置開発室も協力）で盛んに行われていた分光器やビームラインの建設が、UVSOR-II以降では外注されるようになりました。異動後の主な業務はエンドステーション関連の設

計・製作でした。専門的な知識が不十分な中で毎回満足のいく技術を提供できたかどうかは疑問が残りますが、研究者やスタッフの方々の助けを借りてなんとか業務を遂行することができたと思います。特に、製作した装置が実験でうまく機能し、その成功の報告を受けると内心嬉しく思うことが多くあ

りました。

最後に、分子研では装置開発室とUVSORでそれぞれおよそ20年間勤務させていただきましたが、幸いにも両施設ともに実験機器の設計・製作を主な業務とさせていただき、一貫して「物づくり」を楽しませていただけたことは大変幸運でした。これは、研究者・

技術職員をはじめとした皆様方の温かいご指導・ご支援があったからだと思っています。この場を借りまして深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

菊地 拓郎

東京大学 生産技術研究所 試作工場 一般技術職員
(前 技術推進部 装置開発ユニット 技術職員)

感謝と申し訳なさこれから

きくち・たくろう／2011年信州大学理学部物理科学科卒業。民間企業2社を経験後、2018年5月より分子科学研究所装置開発室特任専門員、2019年2月に技術職員として採用される。機械設計、機械工作および電気めっきなどの表面処理技術を担当。2024年4月より現職。



2018年5月から2024年3月までの約6年間にわたり、装置開発室の技術職員として、お世話になりました。2024年4月より東京大学生産技術研究所試作工場の技術職員に着任いたしました。分子研とはまた違った大きい組織の中にいる環境と同世代が多い職場で刺激を受けながら毎日を過ごしております。

私の人生を振り返ると、なにかと良い巡り合わせで成り立っているのだなとつくづく感じる事が多く、分子研に入所したこともそのひとつでした。当時求職中だった私がUVSORの職員公募を目にして、応募したのが分子研との出会いでした。この公募では、残念ながら採用に至りませんでした。窓口担当だった中村永研氏と面接に同席されていた当時装置開発室班長だった青山正樹氏（現 名城大学）から装置開発室での公募もはじまることをご案内いただき、その後に縁あって採用して頂きました。お二方には、今でも何

かと気に掛けてくださり、感謝しかありません。

そして、30歳にして初めて機械工作の職務に携わり、技術職員としてのキャリアがスタートしました。ボール盤の使い方すら怪しかったのは、今思うとマシニストとしてお恥ずかしい限りですが、青山氏、近藤聖彦氏、故水谷伸雄氏らの丁寧な指導を受けたこと、依頼業務に携わることで、少しずつ工作に関する技能を身につけることができました。また、民間時代に携わっていためっき技術の経験から電鍍技術の導入も一からやらせてもらい、研究に使用する物品を提供できるまでになりました。この自由度の高さも分子研らしさだと感じています。

分子研の研究活動を支える一員として多少なりとも貢献できていることを実感する中で、分子研を去ることとなってしまったことに対しては、いまでも申し訳ない気持ちでいっぱいです。現職の採用に至ったのも、分子研で過ご

した経験が評価されてのことだと思えますので、その意味でも感謝の念に堪えません。分子研で受けた恩を少しも返せていないので、これからも機械工作の経験を重ね、試作工場を訪ねる方々に頼られる「研究者にとって一番身近な技術者」になることを心掛けて精進していくことが、巡り巡って分子研への恩返しになればと考えています。

最後に、先述の皆様をはじめとした装置開発ユニットと技術推進部の皆様、依頼を通して携わった先生、学生の皆様にこの場を借りて、感謝申し上げます。ありがとうございました。また、今後も研究会など何かの折にお目にかかることもあるかと思います。その際はお気軽に声をおかけいただければ幸いです。